「旧街道」（東浦路・東浦筋）

この旧街道は、鎌倉時代から小田原で東海道から別れ、下田までの重要な街道であった。このうち中央区立宇佐美学園裏側から網代峠の茶屋までの約４kmは、最も自然が残っている区間です。

江戸時代に書かれた 宇佐美旧街道日記 宇佐美から網代

宇佐美村、砂利浜を行き、村里に至りて、左の方に春日の社あるを行きて拝みつ。この社頭に安宅丸という御船を造らしめ給うころ伐りたりけむ楠なむ有りける。伐りたし木の幹は十二人してかかゆといえり。行く手の左に、鎮守八幡宮と額打ちたる石の鳥居あり。
村長半三郎の家に休らいて、ゆききの道の松の葉越に、海の面をながむれば、左は真鶴崎、右は川奈崎を限れり。磯打つ波の景色ことさらにかし。庭に大なる蘇鉄のあまた枝ふりたるあり。所望したけれども、持伝えたる木とていなみつ。又山越えなり。この所海見ず。峠を網代峠という。ここよりして網代村の境なり。峠よりは海望よろし。乾の方畳嶺の上に、富士の嶺二合目より上見ゆ。右には天城山きのうの雪、未だ消えず見ゆる。
　浦賀奉行小笠原長保「甲申旅日記」

※安宅丸とは三代将軍家光が伊東でつくらせた巨大船。その材木に宇佐美・春日神社の大楠がつかわれた。

家康・秀忠・家光と三代にわたる江戸城築城石の切り出しの大部分は伊東から

家康が江戸へ入った頃の城は、貧弱なものであったが、関ヶ原の戦いに勝って江戸が天下の中心となるにつれて、家康はここを壮大な城につくりかえた。その基礎となる石垣用の石の大部分は、伊豆から運ばせた。慶長10年（1605）から始まる30数年の間に、何回にもわたって全国の大名に命じて石を切り出させた。伊東はその中心的な場所にあたるので、いたる所に大名の石丁場（石の切り出しを行う場所）が置かれ、村の人口の数倍にもあたる作業員が来ていた村もあった。
多い時には、3,000艘もの船が、月に２度ずつ江戸と伊豆の間を往復したといわれ、伊東の村々にも大きな影響があったと思われるが、具体的な内容については、よくわかっていない。現在の皇居（昔の江戸城のあと）の石垣の中にはこうして伊豆から運ばれた石がたくさん入っている。

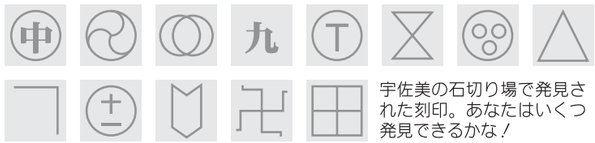
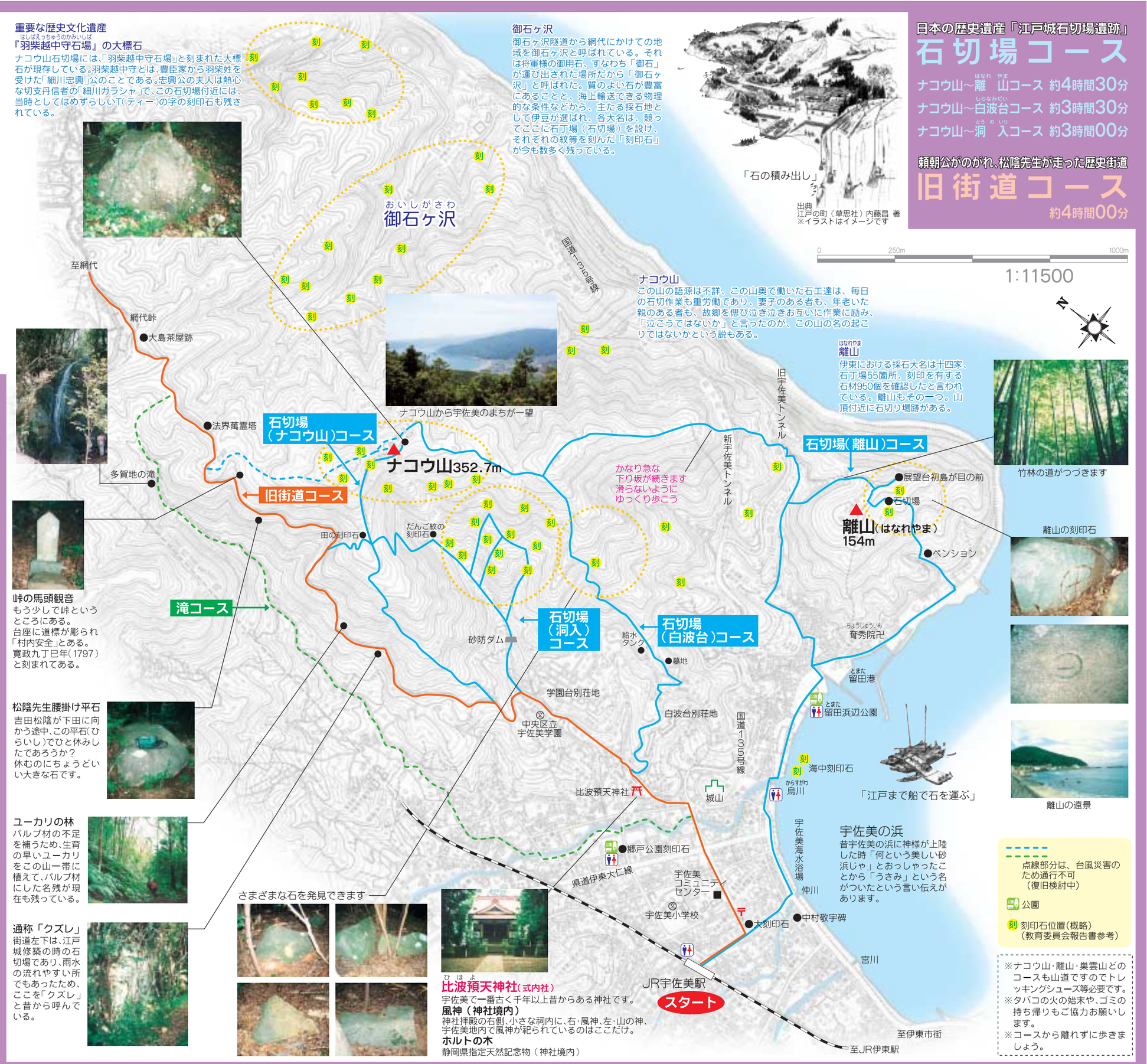
刻印石とは

採石された石には「刻印」が刻まれ付けられることが多く、この刻印が助役大名を決める決め手として重要である。「刻印」を「石垣にノミで刻んだしるし」で「刻印石」と称する。

（丸に一）
これは前田家もしくは細川家と推定。

（丸に十）
島津家の家紋であり、大阪城でも島津忠興の印。佐土原藩島津家の可能性が高い。

（九曜）
伊豆地区の石丁場調査では加賀前田家が九曜を使っている。細川家のものである公算が強い。



宇佐美の石切り場で発見された刻印。あなたはいくつ発見できるかな！